

盆栽は日本の文化 こころの文化です



板子記一 さん
(東本町三丁目・78歳)

植物のある生活を

近年のガーデニングブームもあってか、盆栽が若者からお年寄りまで幅広い人気を集めています。また、日本を訪れる外国人観光客が盆栽を鑑賞することも多くなりました。古河市ではさつきまつりが第33回、古河菊まつりは第50回を数え開催しています。そこで今回は、両方のまつりに第1回から出品し盆栽、菊づくりを50年続けている板子記一さんを訪ねました。

「父親が庭木や盆栽が好きだったせいか、子どものころから興味を持っていましたね。仕事の関係で昭和27年に結城市から古河市に越してきました。家内の実家がタンスの製造をやっていましたので、昭和30年にサラリーマンから家具店経営に転身しました。古河菊花愛好会には昭和28年発足と同時に入会し、早いもので昨年50周年を迎えました。古河盆倶楽会にも昭和43年に入会をしています。盆栽の方は、さつきまつりと秋に文化祭の一環としての盆栽展に展示しています。」

ぶんがくかん発
Vol.69

よしかず 山岡敬和さん - 「雪の歌」で長塚節文学賞受賞 -

初めて

怜子はぶつぶつと文句をいいながら、自転車を走らせていた。

「なんでオレが、ポケジジイの面倒なんか看なきゃいけねーんだよ」

そう吐き捨てるように呟いては、帰宅する同級生たちを尻目に、老人ホームへと向かっていた。

怜子は茨城県立古沼高校の三年生だった。

平成10年第2回長塚節文学賞短編小説部門大賞受賞作品『雪の歌』の冒頭部分を引用いたしました。

物語は、茶髪の生意気な女子高生が、特別養護老人ホームでのボランティアを大学の推薦入学の条件としてだされ、いやいやながら老人ホームへ向かうところから始まります。

作品について審査員の直木賞作家海老沢泰久氏は、「とにかく設定がよかった。読者にページをめくらせるのは小説にはなくてはならぬ力で、この作品はその設定を考えたことによってその力を得たのである。主人公の怜子もじつに生き生きと描かれていたし、ユーモラスなタッチがそここちにちりばめられていたのもよかった。」と絶賛しています。

作者の山岡敬和さんは、昭和30年に岡山県新

見市に生まれました。地元の岡山県立新見高等学校を卒業後、國學院大學文学部文学科を経て同大学大学院日本文学専攻博士課程を修了。現在は國學院大學日本文学科の教授をされています。専攻は中世文学で特に説話文学を専門に研究、近年研究対象の巾を広げているとのこと。

古河に移り住んだのは平成6年で、総合公園を始め自然の豊かさに魅力を感じたといいます。

古河に転入した頃、大学で「堤中納言物語」の指導を行っていて、学生に短編小説を書く課題をだすということがあり、以前から創造への意欲があったので、よい機会と自分でも書いてみようと思ったのが、小説を書き始めたきっかけだといいます。

数編書いたところ「長塚節文学賞」募集の記事が目にとまり、応募したところ見事大賞受賞ということになりました。

研究と創作のバランスを取ることは難しいが、通勤時間の電車の中が創作には丁度適しているの

で、往復の2時間を創作に充てているといいます。文学館では、今年から「源氏物語を読む」講座が始まります。本業の古典研究そして創作活動での活躍を期待したいと思います。「雪の歌」は文学館で読むことができます。



「雪の歌」作者 山岡敬和さん